

日本IT書紀

061 鹵獲品

04 含牙篇
卷之八 重濁

佃均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

鹵獲品

一

確認の意味で一九四一年十二月から四二年四月末までの出来事を書き出す。参照したのは岩波書店『日本史年表』（歴史学研究会編、一九九三）である。

一九四一年

- 12・6 ナチス・ドイツ軍、モスクワ攻略に失敗
- 8 日本軍、マレー半島に上陸。
ハワイ真珠湾を空爆
- 新聞、ラジオの天気予報・気象報道中止
- 9 中国国民政府、日独伊に宣戦布告。
大韓民国臨時政府、対日宣戦布告
- 10 マレー沖海戦（イギリス極東艦隊壊滅）
グアム島を占領
- 11 独・伊、対米宣戦布告

15 第78回臨時議会召集。

16 戦艦「大和」竣工。

電球の切れ球との引き換え販売開始。

19 言論出版集会結社等臨時取締法公布

21 タイと軍事同盟条約締結（日泰共同作戦二関スル協定）

25 日本軍、香港占領

29 南方熊楠没（享年七十四）

一九四二年

1・1 食塩の通帳配給制実施。

連合国26か国が共同宣言

2 日本軍、マニラを占領

8 大東亜戦争国債発行

9 学徒勤労動員開始

25 タイ政府が対米宣戦布告

2・1 衣料、味噌・醤油販売に切符制実施

2 大日本婦人会発足

4 イギリス軍、エジプトでクーデター

5 蒋介石、インドを訪問

6 英米が合同参謀本部を発足

15 シンガポールが陥落（英軍マラーヤ司令部司令官

パーシバル中将が日本軍に降伏）

18 第一次戦捷祝賀で特赦

インド国民会議、反英決議

3・1 日本軍、ジャワ島に上陸

7 大本営政府連絡会議「戦争指導大綱」策定

8 日本軍、ラングーンを占領

9 日本軍、ジャワ島を制圧（オランダ軍降伏）

11 アメリカ極東軍司令官マッカーサーマッカーサー

ー将軍がフィリピンを脱出

13 中国軍、ビルマ戦線に参戦

29 フィリピン抗日人民軍結成

4・5 日本軍、コロンボを空襲

11 日本軍、バタワン半島を制圧

日本が米英宣戦布告に踏み切ったとき、ヨーロッパ戦線は大きな転換期を迎えていた。ナチス・ドイツのロシア攻略が失敗に帰したのだ。

いわゆる「バルバロッサ」作戦がそれで、ナチス・ドイツは百三十五個師団三百八十万人の兵を投入した。これこそが、史上最大の作戦だった。モスクワ陥落を企図したのではなく、東欧エリアからスラブ系民族を追放して、ドイツの植民地化するのがねらいだった。

作戦が発動されたとき、ナチス陸軍首脳は

——二か月もあれば片がつく。

と考えていた。

ところが車両が足りなかった。

燃料もなかった。

例えばレニングラード攻略を目指した北方面軍は、レニングラードまで五百マイルの地に設置した本営を六月二十二日午前三時を期して進撃を開始したものの、二十四日に燃料不足のため機甲部隊が停止してしまった。

このときは空路で燃料を補給したが、二十六日にいたって再び燃料切れのため全軍が足止めとなった。

このようなことでは埒が明かない。

そこで、前線に補給基地を建設しよう、ということになった。

進撃が再開されたのは七月四日だったが、一週間後にまた燃料が切れてしまった。この間にソ連軍は応戦準備を整えることができた。

電撃作戦というと威勢がいいが、実態はこのようなものだった。そもそも「電撃」とか「奇襲」というのは、持たざるものの作戦であって、スポーツと同様、長期戦に持ち込まれると実力の差がはつきりする。

ナチス・ドイツ敗退のニュースを大本営はどうとらえたか。

——我らには大和魂がある。
ぐらゐに考えていた可能性なしとしない。

二

戦争につきまとうのは戦死、戦傷だけではない。捕虜と鹵獲品が必ず出る。戦いに勝った側にとって、捕虜は有用な情報源であり労働力であると同時に、食糧や医療の点では負担になる。

ただ、純粹に軍事的な観点では、日本軍によるマレー攻略作戦、インドシナ侵攻作戦は「絵に描いたような」と形容するに十分な成功だった。またフィリピンの攻略作戦は、上陸からマニラ侵攻までは順調そのものだった。緒戦の南方作戦は、全体として予想をはるかに上回る戦果をあげたといっている。

例えばマレー攻略作戦で日本軍が受けた損害は、戦死三千五百七人、戦傷六千五百五十人の計九千六百五十七人だった。またインドシナ侵攻作戦での戦死は八百四十人、戦傷は一千七百八十四人の計二千六百二十四人である。

これに対して日本軍に降伏したのは、インド軍の六万人を筆頭に、イギリス軍三万八千人、オーストラリア軍一万八千人、マレー義勇軍一万四千人の約十三万人だった。攻

め入った日本軍の総兵力が四万人弱だったのだから、日本軍は作戦終結とともにその三倍以上の食糧や居住地を支配しなければならなくなった。

インドシナ侵攻作戦で連合国軍は兵力をほとんど損傷せず、日本軍に降伏した。ここでも捕虜は七万人を上回った。フィリピンでは、バターン半島および、コレヒドール要塞に立てこもっている連合国軍はせいぜい三万人というのが日本軍の予想だった。ところが白旗をあげて出てきたのは、アメリカ軍一万二千人、フィリピン軍六万四千人の計七万六千人、さらに市民が二万六千人もいた。そのうち三分の一がマラリアに罹り、全員が飢えていた。日本軍にとって不幸な誤算が、バターン死の行軍を生み出した。

物的な戦果（鹵獲品）はどうだったか。

マレー侵攻作戦で日本軍は大量の兵器・武器を押収した。火砲約七百四十門、重軽火器二千五百挺以上、小銃類約六万挺、自動車約一万台、機関車・貨車約一千輛、戦車・装甲車約二百輛、航空機十機などである。

インドシナ侵攻作戦では、パレンバン製油所を接收したほか、ジャワ島のスラバヤにあったオランダの工廠を接收し、これを陸軍から海軍が譲り受けて艦船の補修基地に活用した。このちスラバヤ工廠に松尾三郎（のち日本電子開発、北海道情報大学を創業）が海軍大尉として赴任し、

レーダーの必要性を痛感することになる。

フィリピン制圧作戦で、日本軍はコレヒドール要塞から三千トンの食糧品を発見した。ハム、ベーコン、缶詰、タバコなどが、アメリカ軍が使っていたトラックで運び出された。

このとき、陸軍は要塞の中に不思議な機械装置を発見した。すでに触れているように、ホレリス式パンチカード統計会計機械装置「IBM405」一式のだが、兵士たちは首を傾げるだけだった。ただ、何かしら特殊な機械であるらしいことが分かった。

参謀本部に問い合せると、「ただちに本国に輸送せよ」という回答が返ってきた。しかし、

—— 貴重な機械なので慎重に扱え。

と付け加えなかった。

その不思議な機械は、駆逐艦の甲板に据え付けられ、その年の夏、東京・目黒の海軍研究所に運び込まれた。連日、陽に焼かれ汐に晒されたために、全体が赤サビで覆われていた。研究所員たちはその赤サビを落とす作業から始めなければならなかった。

パンチカード式計算機であることは分かったが、アメリカ軍が何のために使っていたのかは分からなかった。まさか給与計算や受発注管理のために、ではあるまい。コレヒ

ドール要塞に設置されていたからには、軍事的な意味があるはずだった。

陸軍の兵器行政技術部長だった中将・小池国英が電気試験所の部長・山内二郎に

—— 戦場で数学を使うとしたら何だ？

と問いかけたが、答えは出なかった。

砲弾の発射角を計算するために、第日本帝国の海軍は軍艦の砲塔で電動のヘンミ計算尺を使っていた。しかし、パンチカード式計算機は持ち運ぶには大きすぎ、重すぎる。

実はアメリカ軍はIBM405を兵站の管理ばかりでなく、暗号の解析に使っていたのだが、日本にはその発想そのものがなかった。

軍中樞が暗号に数学理論が欠かせないことに気がつくのは四二年末、組織的な取り組みが始まるのは四三年の七月、参謀本部に発足した特殊情報部である。ホレリス型パンチカード式会計分類機械装置のコピーを作った話は後述する。

三

鹵獲品を押収したのは日本軍だけではない。連合国軍も日本軍から様々なものを押収した。ただし連合国軍が手に入れたのは、ガラクタの類だった。とりわけアメリカ軍が

ガラクタの収集に熱心だった。

ハワイとマリアナ諸島を結ぶ線上のほぼ中間点に、「ウエーキ」（または「ウエーク」と呼ばれる島が浮かんでいる。珊瑚礁でできた小さな三つの島——ウィルクス、ウエーキ、ピール——が、「V」字型に並び、最大のウエーキ島ですら、長さ七キロ、幅は最も広いところで約二キロしかない。

ここにアメリカ海軍はウインフィールド・カニングラム中佐を指揮官とする守備隊五百二十三人を配置していた。このほかに島民を主体とする設営隊が千三百余。「V」字の三つの頂点にそれぞれ砲台があり、開戦の直前にウエーキ島飛行場に十二機の戦闘機「F4Fワイルドキャット」が配備されていた。

日本軍が真珠湾を攻撃した、という報せが入ったとき、飛行隊長のブットナム少佐は——ここにも日本軍がくる。

と考え、上空警戒のため四機を発進させた。

四機は高度三千四百メートルに待機していた。ところがマーシャル群島クエゼリン環礁の基地から飛んできた日本軍の零戦と九六式陸上攻撃機計三十四機は、高度六百メートルという低空で侵入した。そのために哨戒機はまったく気がつかなかった。

日本軍機はウエーキ島の地上施設——無線司令室、燃料タンク、機材倉庫、滑走路——などに爆弾を落とし、滑走路に駐機してあった八機のワイルドキャットに機銃掃射を浴びせた。それによって八機のうち七機が大破・炎上し、残る一機も穴だらけになった。

上空を哨戒していた四機は急を知らせる無線を受けて急降下したが、舞い降りたときには日本軍機ははるか遠くに去っていた。燃料タンクから黒煙がもうもうと上がり、滑走路は穴だらけになっていた。着陸したとき、四機のうち一機が横転し、エンジンが壊れてしまった。十二機だった戦闘機は、たった数分で四機になった。

ここからウエーキ島航空基地の「奇跡」が始まる。部隊に手先が器用なジョン・キニーという大尉がいて、彼は徹夜の作業で二機を飛べるように修理したのだ。

ウエーキ島航空隊の戦闘機は四機から六機になった。

翌日も日本の九六式陸上攻撃機が二十七機の編隊でやってきて、空襲を行った。

三日目には九六式陸上攻撃機が二十六機やってきた。

アメリカ側の記録によると、ウエーキ島航空隊は、二日目に日本の爆撃機を一機、三日目に二機を撃墜したことになる。

十二月十一日未明、日本海軍の軽巡洋艦三、駆逐艦六、

哨戒艇一、潜水艦六、輸送船二から成る第一次ウエーキ島攻略隊が上陸作戦を開始した。このとき、沈黙を守っていた島の砲台が火を吹いた。

十分に牽き付けた上での射撃だったので、撃ち出す砲弾のすべてが日本の艦船に当たった。直近弾を受けて駆逐艦「疾風」が轟沈、駆逐艦「追風」「弥生」に被害を与えた。さらにワイルドキャット四機が襲いかかった。支援部隊の軽巡洋艦「天龍」「龍田」小破、駆逐艦「如月」轟沈。

四

日本軍は上陸をあきらめて撤退していったが、ウエーキ島守備隊も甚大な損失に直面していた。

六機のワイルドキャットのうち一機が砂浜に不時着陸して炎上、もう一機もエンジンがばらばらになってしまった。その四時間後、今度は九六式陸上攻撃機十七機が襲来し、守備隊の戦闘機三機（日本側記録では二機）が撃墜され、十四日の空襲でさらに一機を失った。ウエーキ島航空隊はこれで壊滅したことになる。

だがキニー大尉はあきらめなかった。破壊されたワイルドキャットの部品をかき集め、徹夜の作業で飛行可能な機体を二機、再生したのである。ウエーキ島の航空隊がよみ

がえった。日本軍はそのことを知らなかった。

十二月二十二日、機動部隊からウエーキ島攻略の支援に回った空母「蒼龍」「飛龍」から発進した九七式艦上攻撃機三十三、零戦六の編隊が攻撃した。その際、日本軍はワイルドキャットの反撃を受けて大いに驚いた。日本軍は航空機二機を失い、その代償としてワイルドキャットの残機をすべて撃墜した。

日本軍にとって、ウエーキ島のアメリカ海軍守備隊は「こしゃくなヤツ」であった。

たった四機の戦闘機のために、駆逐艦二隻を失い、九六式陸上攻撃機を何機も撃墜され、攻撃を始めてから一週間たっても占領できずにいる。

業を煮やした帝国海軍軍令部は、次の作戦行動の準備にあつた機動部隊の一部を割いてウエーキ島攻略の「支援」に当たらせることにした。「支援」というのは機動部隊の面子を立てた表現であつて、実態は主力の入れ替えである。

その陣容は、空母「蒼龍」「飛龍」の二隻を中軸に、重巡洋艦「利根」「筑摩」「青葉」「衣笠」「加古」「古鷹」の六隻、駆逐艦「夕風」「朝風」の二隻、輸送船「聖川丸」「天洋丸」の二隻、計十隻の大艦隊である。

ウエーキ島は、長さ七キロ、最大幅約二キロの珊瑚礁の島に過ぎない。しかも守備隊の兵力は四百人を切るまでに

減少していた。

「たかが」であった。

十二月二十三日は皇太子の誕生日だった。

日本軍は同日午前零時から上陸作戦を開始し、三時間後に陸戦兵を乗せた二隻の哨戒艇が砂浜に乗り上げた。とたんに前面の陣地から砲撃があり、哨戒艇が炎上した。その炎の中に千を上回る日本兵が見えた。

守備隊は絶望的な状況のなかでよく戦った。真つ暗な中でマングローブや灌木に潜み、手榴弾と機銃で日本軍陸戦隊の進軍をはばみ、最後は銃剣とナイフで白兵戦を展開した。だが多勢に無勢だった。

民間人七十人を含む百二十人の戦死者、四十九人の戦傷者を出し、ついに降伏した。死亡した民間人七十人の大半は、攻撃二日目に爆撃された病院の入院患者だった。対して日本軍は戦死四百四十、戦傷百五十九。

アメリカ軍は日本軍のガラクタを集めるのが、このほか好きだった、ということを書いた。

その最初のガラクタ集めが、このウェーキ島攻防戦の中で起こっていた。

海岸からほど近くに轟沈した駆逐艦「疾風」の中から、アメリカ海軍は文書の束を回収した。海水に浸っていたために、紙がゴワゴワになっていたが、文字は鮮明に読むこ

とができた。島の守備隊が日本軍に降伏する直前の十二月二十日、飛行艇が着水し、紙くずのようになった文書の束を運び去った。

それは日本海軍の暗号書だった。

このことが戦局を微妙に、そして最後に大きく動かしていく。

補注

大韓民国臨時政府 大韓帝国が日本領に編入された一九〇九年、中国の上海にあつた抗日組織を母体に樹立され、二九年の光州学生事件など反日闘争を指導した。李承晩が大統領に推戴され憲政体制のもとで立法機関である臨時議政院、司法機関である法院、行政機関である國務院で構成する民主共和制政府として機能した。

戦艦「大和」 一九四一年十二月に竣工し、四二年二月就役して連合艦隊旗艦となつた。ミッドウェー海戦に参加したが決戦に間に合はず、その後一年以上をトラック島に停泊しているだけという時代遅れの巨大戦艦だつた。主砲の四十六センチ砲が発射した砲弾は三百十一発だつたと記録されている。

シンガポール陥落 直接原因は水源を日本軍に握られたことであつた。パールは飲み水に毒が投じられることを恐れたのであつた。

パール Arthur Ernest Percival / 1880.7.16.62. イギリス下層階級の生まれで陸軍の一兵卒から出世し、ナチス・ドイツとの戦いではダンケルクに追い詰められた英仏連合軍二十二万人の救出作戦を指揮し、ドイツ空軍機の激しい爆撃のなかで十八万人強を救出することに成功した。のち極東軍司令官に任じられたが、本国から増援のない状況でよく戦つた。シンガポール陥落に伴う山下奉文への無条件降伏は「イエスカノーカ」の問答で有名だが、日本軍の捕虜となつてのちもイギリス、オランダ軍捕虜をよく統率した。またミズーリ号甲板上で行われた日本の降伏文書署名にイギリス軍代表として出席している。

マッカーサーとフィリピン マッカーサーの父親であるアーサー・マッカーサーが陸軍中将だつたとき、フィリピン軍政官として赴任していた。息子ダグラスにとつては第二の故郷といふべき土地だつた。のち四三年一月、アメリカ海軍省作戦部長キングが提案した中部太平洋からの日本軍攻略方針に対し、「フィリピン開放の時宜は逸した」として独自の戦略を開陳した。結果としてマッカーサーの戦略が採用された。

バターン死の行軍

コレヒドール攻略戦に参加していた第四百十一連隊隊長の今井武夫(当時大佐)は、戦後、アメリカ軍から事情聴取を受けたとき、「他の方面での出来事だと考えた。まさか自分が目撃した捕虜の行軍のこととは夢想だにしなかつた」と語っている。

マレー侵攻作戦 一九四一年十二月～一九四二年二月：対英戦争。
インドシナ侵攻作戦 一九四二年二月：対仏・蘭戦争。
フィリピン制圧作戦 一九四一年十二月～一九四二年五月：対米戦争。

バルバロッサ作戦 Unternehmen Barbarossa：一九四一年六月二十二日に開始され十二月五日に終了した。ナチス・ドイツは枢軸国軍三百八十八万人超、車両六十万台、馬匹六十万頭超を投入した。ラトビア、リトニア、ペラルーシ、ウクライナ、モルドバといった東欧圏からスラブ系住民を追い出してドイツの植民地にするヒトラーの構想(夢想)に基づいた史上最大の侵攻作戦だつた。四一年十月二日から四二年一月七日にかけて行われたモスクワの戦いでドイツ軍が劣勢に陥つたことが、第二次大戦の趨勢を転換させた。

陸軍兵器行政本部 一九四二年から四五年まで陸軍省の外局とし

て設置された。陸軍の兵器・弾薬などについて、製造・補給、研究開発・試験、教育を一元的に統括した。

小池国英 こいけ・くにひで／1892～1959。

山内二郎 やまうち・じろう／1898～1984。のち情報処理学会会長となった。

ウエーキ島 「ウエーク」とも。第二次大戦後、同島の飛行場は拡張整備され太平洋航空路の中継点として重きを成した。

ウィンフィールド・カニングム Winfield S. Cunningham／1900～1986。ウエーキ島の戦いで日本軍の捕虜となり、横浜を経て上海の収容所に送られた。第二次大戦後、海軍に復帰し、一九五〇年七月、少将として退役した。

カニングム守備隊 一九四一年十二月三日、真珠湾から空母エンタープライズでウエーキ島に配備された。制式名称は海兵隊第211戦闘飛行隊である。

F4Fワイルドキャット 一九三六年三月にアメリカ海軍が発注したF3F複製式戦闘機の後継機としてグラマン社が開発した「F4F-1」複製機をベースに、単葉・全金属製に改良した。

ブリーユスター社の「F2A」(バッファロー)と並んで太平洋戦争における連合国軍の主力戦闘機となった。イギリスでは「マーレット」と呼ばれた。

最大速度は五百三十一キロ/時、最大航続距離は二千七百二十キロで、十二・七ミリ機銃四基、九十キロ爆弾二個を装備した。

航空母艦に収納するため翼を折りたたむようにした4型が一九四一年から自動車メーカーのラインで増産され、第二次大戦全期を通じて計七八百機が生産されている。日本の零戦に比べて上昇・旋回性能が劣ったものの急降下性能や防弾設備、武装、高空

性能等で勝っていた。またエンジンの馬力が零戦より強かったため、零戦に比べ墜落や失速が少なかった。このため搭乗員の生存率が高かったといわれる。

守備隊の健闘 ウエーキ島守備隊の健闘はルソン島コレヒドール要塞の戦いと並んでアメリカ合衆国本土で大いに宣伝され、太平洋戦争に挑むアメリカ国民の気持ちを奮い立たせた。

日本IT書紀 061 鹵獲品

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。